

## なくしたタイヤの指輪

小生、二年間、軍隊に入っておったのだが、一週間前にタイヤの指輪をなくしてしまったのである。あの指輪のことは絶対忘れられん。というのは、小生が常に目をやるところを眺めるたびに、あれがすぐ目に入っていたからである。すなわち、あの指輪は唯一のものであった。その第一の理由は小生は指輪をただ一つしか持っていないからなのだ……燃えるような輝きをあの指輪は持っていた。消防車が出動したこともあったほどだ。稲妻のように光った。

ただ雷だけが欠けていた。雷も備わっておつたら、まったくの雷ドンナーヴェッター 指輪だ

つたろう。ある男が一度、小生にこんなことを言いおつた。「おやまあ、すばらしい指輪をお持ちですな」ドンナーヴェッター どうしてあの指輪がなくなってしまったのか、それは今もつて小生には謎である。一週間前にはまだあった。つまり指輪はなくなるまでに一週間と一日要したという訳だ。小生にとってあの指輪がそんなに大事だった訳ではない。ただ、そこに入れるとても映えたあのピロードの

ケースはどうしたらいいのだらう。小生がまた指輪を手に入れるかどうか誰にもわかりはしない。それもあのケースにきれいに納まる奴を。あの指輪みたいに。やれやれ、もうあの指輪はもうないのだ。かつて小生はあの指輪を金細工師のところ修理に出したことはある。さらに加工をしてもらったのだ。いつも指から抜け落ちてしまうものだから。金細工師は今度はひどく大きくしてしまったので、女房が腕輪にできるくらいになっちまった。そんな訳で、指輪はなくなってしまった。皆さん、もし小生がすぐに新聞に遺失物広告を出してたならば、指輪は戻ってきてたかも知れない。でも、もう一週間経ってしまった。もう、あの指輪がどんな見かけをしていたか、よくわからなくなってきた。まん中に指を通す穴が一つあったことや、五十マルクしたってことくらいしか覚えていない。

やれやれ、そんな指輪なんて世間にいくらでもありませんな……

実を言えば、指輪をなくしてしまって小生は嬉しいのだ。だって、いつ盗まれるかわかったもんではないから。